





「あ！ベテランおじさんお久しぶりです！」

「やあ。アドバイスは役に立ったかな」

「はい！本当に薄着の方が効率的な  
気がしました！あ、でも……」

「でも？」

「まだ、ミッションの後すぐに  
疲れてしまって……」

「ふむふむ、ちょっと調べてみよう」

「お願いします！」

「ふ、……うあ！あ……」

「この辺り、フォトンの流れがよくないねえ」

「そう……、なんで、すか……あつ！」



「は、……あ！乳首、ばっかり……そんなっ！」

「これは乳首を鍛える特訓だからね！」

「そこ、弱くて……っ！ごめんな、さい……」

声……出ちゃ……、はうっ！」



「これは……、よく調べてみよう」

「きゃ、あ……っ!?見えちゃ、あっ!」

「外気に触れたほうがフォトンの巡りが云々」

「そう……なんっ、ああっ!?!」



「は……っ！ふあ、……？」  
「おじさ……、何か……あたって……」  
「こっちにも刺激が必要だからね」  
「なる、ほど……っ、なんだか  
お腹の奥が、むずむずします……っ！」



「いい流れになってきている証拠だよ」

「は……あっ!?ひ、あああああ……ッ!」

「ん?どうかした?」

「おじさ……、そっちは、はああっ!

クリ、抓っちゃ……、ひや!?!」



「……だ、めっ、あ……ッ!いく、あ……!  
うあああああッ!」  
「いいぞ、そのままイけっ」  
「……ひゃ、い……!い、きま……っ!  
あ、はああああッ!」





「……は……あ……、ありがとう、  
ございました。なんだか体が  
軽くなったような気がします……」  
「いや、まだ硬いな。次の特訓だ!」  
「……は、はい。精一杯頑張ります!」



「ああ、君は寝てるだけでいいから」

「ひゃっ……!?何を……?」

「えーと、これは……そう!

さっき胸に溜まったフオトンをおじさんと高めあうんだよ!」



「な……、る……ほどっ、あっ！」

「そうそう。こうやって……」

「あの、……これ、パイズリ……？」

「巷ではそうともいうね……、  
これも特訓なんだ！」



「これがフォトンの活性化にいいんだよ！」

「んっ！……確かに、すごい……

硬くて、熱い……？」

「ああ、おじさんのフォトンが  
高まってきた証拠だよ！」



「そ、う……なんですか……っ！」

「ああ、それにしてもこの胸、なかなか真似出来ないぞ！」

「……ひゃ、あつ！」

「ありがとう、ございます……っ」





「ふう、……こんな感じで、  
次は自分の手で胸動かしてね」

「……はっ、あ……っ!!は、い……」



「よし。では、次の特訓にはいろう」

「えっ……、まだあるんですか!?!」





「さっき溜め込んだフオトン、手の届かない奥まで、コレで流し込むんだよ」  
「あつ……!?でも、それ……!」  
「まっで……わたし、まだ……っ」  
「何、それはいかん!大丈夫、おじさんに任せておきなさい!」



「えっ……、あ……は、あ！い、……た！」

「最初だけだ、からっ！力を抜いて……」

「ん、あ……！はい、あ……ああっ！」



「……は……あ！あ、……はあっ！」

「……どう、おじさんのフオンを感じるかい！」

「ひ、あ……!?そんな、わか、り……」

まっ……あああっ!?!」



「ほら、ちゃんと……答えなさい！」  
「あ、ああッ!?奥まで、そんな……  
い、あ……!感じ、ます……!」  
「OKだ!じゃあ最後の、仕上げを——」  
「う……ああああッ!」



「は、う……、……あつ……おわ、った……?」

「いや?おじさんはまだまだ元気だぞ!」

「そんな、わ……たし……、もう……っ!」

「自分の限界を知っておくのも  
大切な事だからな!」



「や、あ……!?……許し……、ああっ!?!」  
「色んな所が使えるとせいで……フォトン  
を搾り取れるぞお!」  
「ま……つで……、あああああ……ッ!?!」



「ほら、もう先っぽを飲み込んだぞ！」

「……ん、ぐ……ううッ!？」

「よし……一気に、奥までっ！」



「よ、し……全部、はい……った！」

「あ……、やめ……おし、り……変に……なるッ

わた、し……こんな、……ああっ!？」





「……なん、で……わ、たし……  
おしり……い、……くっ……はあっ!?!」  
「いいぞ……おじさんも、一緒に——」  
「や、あ……あああああッ!!」



「は……、あ……こんな、あ……」

おなか……い、ぱい……っ……あ！」

「よく頑張ったね……、この特訓を毎日続ければ  
きっとおじさんのようになれるよ」

「そ、な……、まいに、ち……なんて」

「手が空いたら呼び出すからすぐ来るんだぞ」

「……は、い……」



「……や……あ！……おじさ、ん  
しぼっちゃ……、ふあっ！」  
「お腹、大きくなったし、今日からは  
ケツ穴特訓にしようか」  
「あ……はいっ！……赤ちゃん産まれたら  
またおまんこ特訓しましょうね♥」



END

「……センパイ、何だよこのインナー……」

「可愛いのがあがるって言うてるのに  
使ってくれないから……」

「だからってこんな、もっとひどいじゃないか」

「デフォルトの奴なのに!!」





「まあいいじゃないか。これからもっと  
恥ずかしい事するんだから」

「……やっぱり。2年ぶりだつてのに……」

「こっちはまったく実感ないんだけどね。  
せっかくだし成長を確かめよう」

あ

は

す

す

「成長って……見れば、わかるくせに……ん！」

「そうかな？ちよつと肉付きがよくなった  
かもしれないぞ？」



「だから、そんなに変わってないって……」

「ふむ、ならば味をみでみよう」

「うあッ……あっ!?!」





「うん、あんまり使ってないな。

誰ともしなかったの？」

「な……っ、おれは、センパイだけしか……」

「えー本当？じゃあオナニーは？」

「っ……!?う、ううう……!!」

びく、

はっ

びく、

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ



「ほらほら、答えないと指入れちゃうぞ」

「ひあ……!?も、入れて……ああッ!?!」

「尻穴も舐めちゃうぞ〜」

「だか、らっ……!?あ、はあッ!

やめ……、そん、な……あ!」



「っ……、久しぶりだっていうのに、  
飛ばしすぎだろ……」  
「いや、反応が面白くて」  
「ば、かっ……！」



「……」

「むね、変わってないなって思っただろ……」

「そんな事ないぞ。おいしいおいしい」

「ん……っ！そんな、乳首ばかり……」



「は、……あっ! センパ、イ……あっ!」

「ん~~~~ふはっ! ぐふも」

「ちょ……っ、吸い、ながら……」

喋らないで、あ……んっ!」



「セン、パ……うあっ!?  
だ、め……!そんな、噛んだ、ら……ッ!」



「……は、……! あ……っ  
センパイ、おれ……、もう……」  
「え、なに?」  
「……ほんとに、意地悪だな……」



「センパイ、……は、やく……」

「もうちょっと下品な感じで  
おねだりしてくれると嬉しいんだけど  
……仕方がないか」



「センパイ、……は、やく……」

「はいはい、つと……!!」





「……あつ、はう……ああつ！」

「なんか……キツくなってるな！」

「ひさし、ぶりだつて……

いって、るだろ……おつ！」

はあ

ああ

ぎゅ

ちゅ

ちゅ



「……悪かった、よ!空いた分、  
埋め合わせ……する、からっ!」

「あっ!?はげ……し、っ……!」



「……っ……は！……出、るっ！」

「はっ……あ!?っ……セン、パ……あああっ！」



「……っ……あ、……子ども、出来るかな……」

「えっ」

「なん、だよ……。欲しく、ないのか」

「いや、うん……。あー」





「ちよっ……、もう回復したのかよ  
もう少し、休ませ……」  
「だって、かわいい事言うから……」  
「か、わっ……!?!」

は。

ズ  
ズ

ん

ん



「ま……っで!?そっち、は、あ……っ!」  
「いやあ、子どもはいいんだけど、  
やっぱりほら一緒に戦いたいじゃん」  
「そ、それは……あっ!なんか、  
もっともらしい事言っで……  
ごまかされてる感じが……あっ!?!」



「あ……っ!? く……あぁっ!?!」

「……ほ、らっ! おしりでも、したいじゃん!」

「だ、……うあッ!? だめ……あぁぁっ!?!」



「……はっ……ああっ！セン、パ……  
くるし、あ……！は、ああっ！」

「……キツ、いな！でも、いいぞっ！」

「は、……あッ……！いい、のか……

じゃ、あ……おれ……がんばる、からっ！」

は  
ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ





「だいじょ……、ぶ!も、う……ッ!」

「はっ!……き、てッ……、……えっ!」

「……は……、あ!イク、う!」

「ん、ッ~~~~~!?!」

んんんんんん



「……はっ……、あ……」

「……どうだった?」

「ん、あ……、いたい、だけだ……」

「そっかー。まあ何度もやっでれば慣れるよ、ね?」

「あ、ちよ……!?調子に、乗るなあ!」

は

あ……

はっ

はっ

はっ

「あ……っ……はあ！おし……、り！  
ダメ……、あはっ！あ……あ！」  
「……いやあ、色々  
なるようになっちゃったな……」



「は、あ……！イ、く……！センパ、あ！  
あああああっ！」

END

「という訳でコレを頼む」

「突然ですね……。どういう訳ですか」

「え……シーナの頃は  
何でもしてくれたのに」

「もう……あの頃とは違います。  
ですが、貴方様にはお世話に  
なりましたし……わかりました」

クキ  
クキ  
クキ



「じゃあさっそく……いやーこの  
チンコ入れる穴が気になってたんだよね！」

「……はあ、そうですか」



「お、お……、この圧迫感……！」

「……は、はあ」



「く……、ちょっと動かしづらいな……！」

「あの……、落ち着いて、下さい」

「っ……でも、もうすぐっ！」

「え!?あの……、出来れば、外に——」

しゃ  
っ

しゃ  
っ

しゃ  
っ



「あ……、間に合わな——」

「んっ……！」





「……いやあ悪い悪い」

「もう……、気が済みましたか」

「はは、そんなまさか」

「あ、ちょっと……!?何を——」



「あ、何……を!?やめて、下さい……!!」

「まあまあ。前はどこでも

やらせてくれたじゃない」

「だから……、もう私は……」

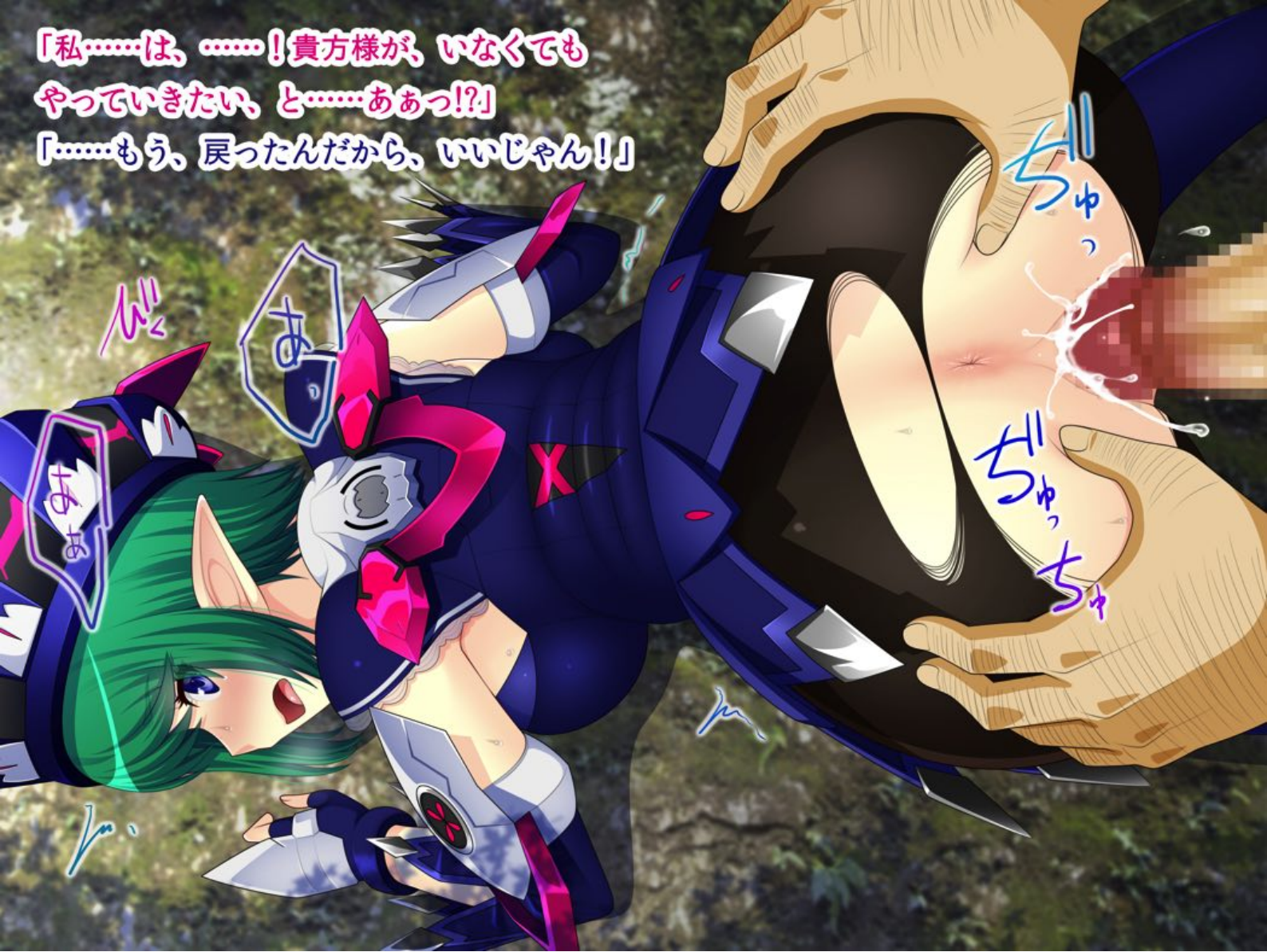


「ほら、コレ突っ込んでみたらわかるよ」

「……それ、は……」



「私……は、……! 貴方様が、いなくても  
やっていきたい、と……あぁっ!?!」  
「……もう、戻ったんだから、いいじゃん!」



「それ、……は、……!……ああっ!?

ひ、あ……、あっ!」

「ほら、体はして欲しいって答えてるよ」



「あ、それともケツ穴の方がよかったかな？

好きだったもんな？」

「ひゃ、うっ!?そんな……事はっ、あっ！」



「じゃ、とりあえず……こっちに!」

「あつ、は……あああああつ!?!」



「ほら、ケツ穴に欲しいよね？」  
「……っ！お願い、……します……  
入れて、……下さ、い……っ！」  
「そうそう、素直がいちば、んっ——」





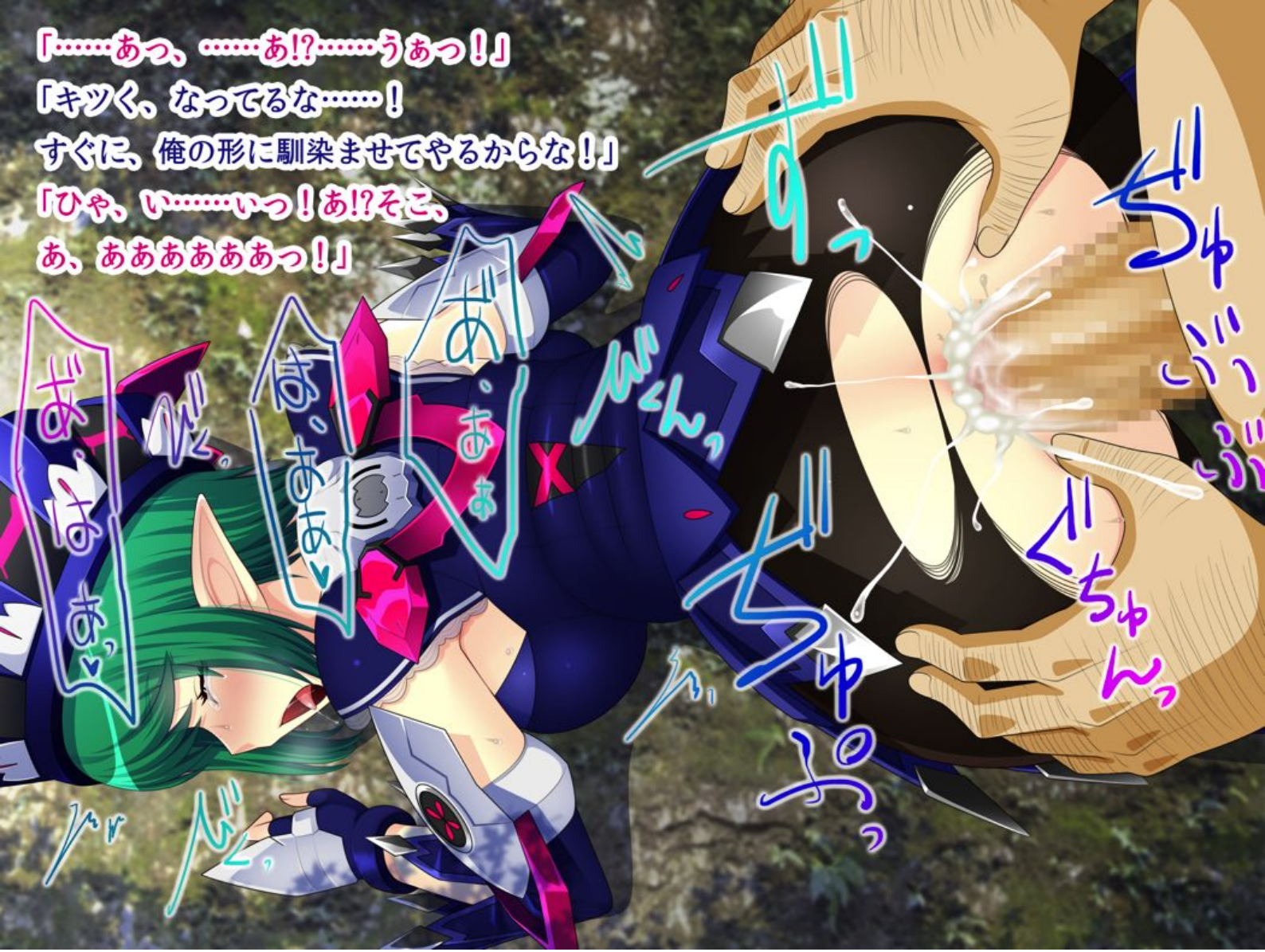
「……あつ、……あ!?……うあつ!」

「キツく、なってるな……!」

「すぐに、俺の形に馴染ませでやるからな!」

「ひゃ、い……いつ!あ!?そこ、

あ、あああああつ!」



「奥、まで……入った!!」

「あ……は!そこ……おっ!

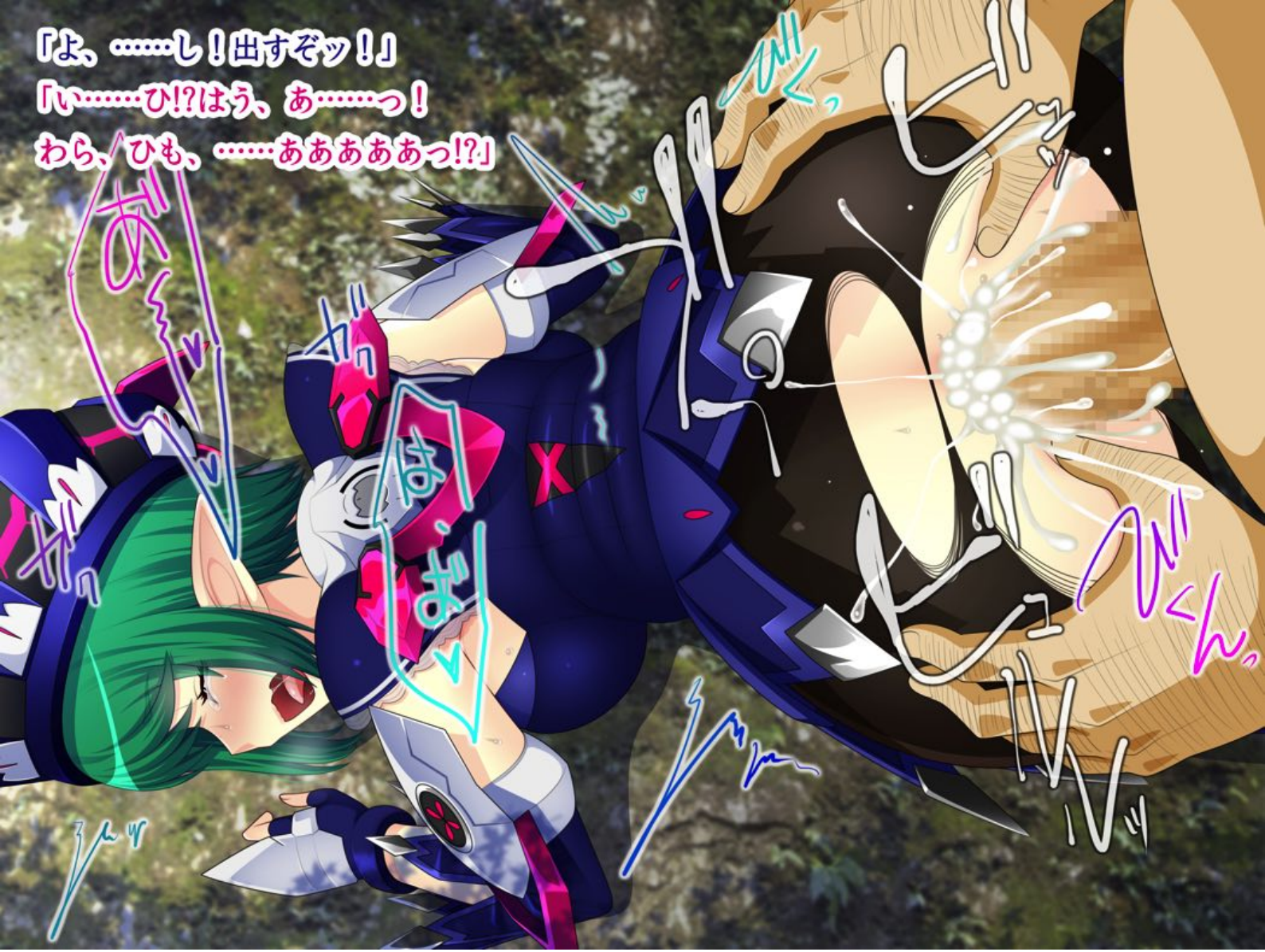
……いぐっ……、うあ!はあっ!!」



「よ、……し！出すぞッ！」

「い……ひ!?ほう、あ……っ！」

「わら、ひも、……あああああっ?!」



「ふう、……よし、次は服を脱いで上になれ」

「……まだ、続けるのですね……」

「わかり、ました……」



「は……、あ！いかがで、しょうか……」

「ほら、もつと腰ふつて」

「……、いつ!?は、い……っ!」

ん



お

い  
ち  
ん

い  
ち  
ん





「ちょっと強めにされるのが好きなんだよな？」

「は……、いッ!……う、くうっ!」

「腰の動きを止めるな」

「も、しわけ……、ありま、せ……んんっ!?!」



「はっ……!出る、ぞっ!」

「下さ……、いッ……!貴方様の、精液……」

私の、なか、に……っ!」

はっ、っ

はっ、っ

はっ、っ

はっ、っ

はっ、っ

はっ、っ





「は……、……あつ、……んっ!あの……」

「？」

「おかえり、なさい……」



「あの、今日は……どうなさいますか？」

「え、うーん……、身体大丈夫？」

「ありがとうございます。それでは——」



「こちらで、いかがでしょうか」

「ああ、それなら——」



「んっ……、どうぞ」



「……は、熱……い、ですね」

「っ……！動くぞ……」





「で、るっ……！」

「……んっ!?!」



「は、あつ……！」

「……ん？母乳出てるのか？」

「あ……、そうですね……。」

「嬉しい、です……」





「おお、溢れてくる……！」

「あ、は……！ああ……！」

玩具にしては、駄目です……っ！」



END



「こんな所に呼び出して、何の用ですか」

「用ってほどでもないんだけどさ、  
起きたら三年とか経ってるじゃん。  
どうしてるかなー、とか？」  
「わたしは、そんなに暇ではないんですけど」

「またまた〜。来たって事は、  
期待してんじゃないの？」

「……っ!!」



「あ、それともおっばいより  
こっちの方がよかった?」

「ひゃ……あっ!?!」



「ちょっと……、やめて、下さい……ッ」

「やめるの？本当に～？」

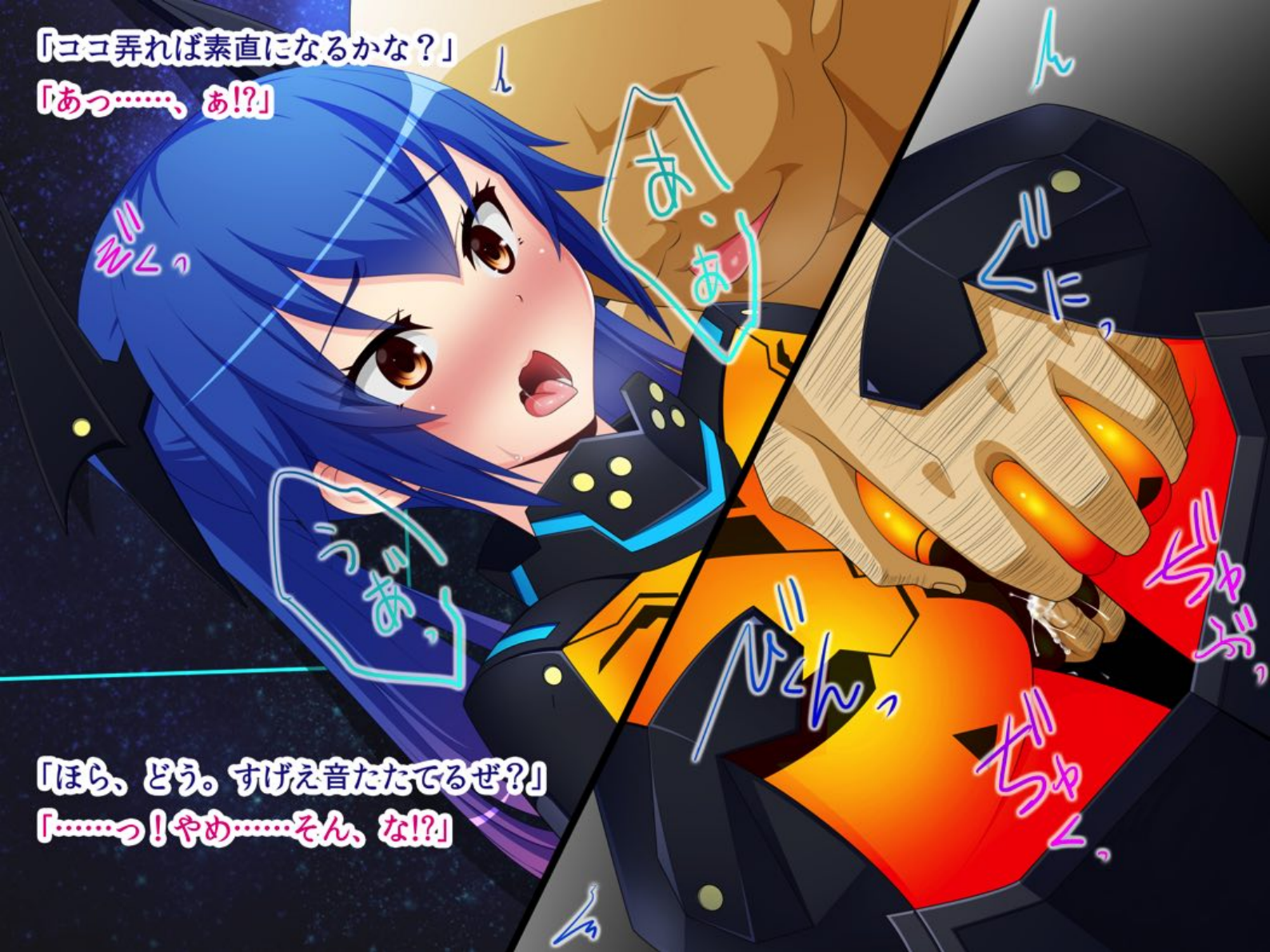


「ココ弄れば素直になるかな？」

「あつ……、あ!?!」

「ほら、どう。すげえ音たてるぜ?」

「……っ!やめ……そん、な!?!」



「それともこっちの穴の方がいいか？」

「な……、うあつ……あ!？」



「ほらこれ、糸引いでるぜ？」

「……く、……意地が悪いです、ね……」







「何……をつ!?!」

「いや、意地悪しすぎたから……お詫び?」

「ちょっと……、やめ——」



「待つて、下さい!それ……破いたら」  
「え?あ、そういえば……  
生でしたことってなかったっけ?」



「まあいじゃん。もうLIVEの代わりもあるし  
妊娠してアイドルは引退しよう」  
「そんな、無茶な……あぁっ!?!」



「う、あ……あ!だ、め……あっ!  
そ、こ……あああつ!?!」  
「そうそう、いい具合だぞ!」  
「や……め、はああつ!?!」



「き、た!.....出るっ!!」  
「だ.....め、えええええええっ!!」



「……ここ、は……！」

「LIVE会場？ステージ無いけど」

「悪趣味、です……」

「ちなみに衣装は宣材ポスターで  
使ってた奴を聞取引しました」



「ほら、そうやって観客に  
マンコ見せてると思うと興奮しない？」  
「……そんな、訳……」  
「そう？むっちゃ濡れてるけど？」





「それ……は、……あああつ!?!」

「よし、舐めとつてやろう」

「ちよ、あ……、はあつ!」



「ケツ穴も寂しそうだな」

「ひ……いッ!?や、だめ……っ!そん、な!

両方、穿られたら……あ、はっ!」



「……は、あ……っ！も……う、いいでしょう？」

「入れて、下さ……、いつ……！」

「勿論、中に出してもいいよな？」

「……は、い。構いませんから、早く——」



「……あ、あああッ！」



「ケツ穴にはこれを、プレゼントだ」

「あ……はあっ!?うはあっ！」



「い……ひいつ……!そんな……奥、ま、でっ!」

「全部飲み込んだぜ?んじゃ、動くとするか!」

「あ!は……っ!突い、で……は、あああ!」



「は、……あ！いくぞお！」

「ふっ、ぐう！んんん~~~~ツ！」



「……ふう、……おっと、こいつを忘れてたな！」

「なっ、……あ!?う、はあああああッ！」





「う、……は！何てこと、するんですか……」

「よかっただろ？」

「……癖になったら、責任取って下さい、よ——」





「あ……っ、……ま、で……っ！……やす、ませ……あっ！」

「まだまだこれからこれから！何、おかしくなっても  
ちゃんと責任取れば、いいんだろ？」



「……あつ、い……、ぐ……っ!おひ……、り……あつ!」

「こらこら、自分ばかり楽しんでるんじゃないぞ?

ちゃんとケツ穴絞めて、俺も、イカせるんだ!」

「い、……ひッ!?……ふあ、い……いいいっ!」



「あ……、ひ……っ!もう……ゆる、して……くだ、さ……  
イキすぎ、で……、ダメにな……あ、ふあっ……」

「それは、もっとしてって事かな~?」

「ち……がっ!?!……あ、……ああああっ♥」

END